

平田篤胤の転生觀

中川 和明

はじめに

文政六（一八〇六）年七月二三二日、篤胤は関西旅行に出発した。御所への著書献上、本居家の訪問、宣長墓所の参詣などのように、国学運動にとって大変重要な旅行であつた。この時に、篤胤が携行していた著書の中に、『勝五郎再生記聞』^{〔1〕}が含まれていた。これは、いわゆる「生まれ変わり」の問題を扱つたものであつて、大変特異な著述である。

さて、戦後の篤胤国学の研究をリードした村岡典嗣^{〔2〕}、田原嗣郎^{〔3〕}、三木正太郎^{〔4〕}、子安宣邦^{〔5〕}の各氏による篤胤研究書を

みてみると、『勝五郎再生記聞』については、十分論じられていないことに気がつくのである。確かに篤胤の幽冥研究の一環として、『勝五郎再生記聞』に触れているが、深く立ち入った考察をしているわけではない。『仙境異聞』『稻尾物怪錄』などと一括して、軽く触れている程度である。また、浅野順平^{〔6〕}の論考にしても、『勝五郎再生記聞』の紹介の域を出ないのである。

しかし、『勝五郎再生記聞』を再読してみると、様々な疑問が生じるのである。第一に篤胤の転生觀はどのように形成されたのであろうか。第二に篤胤の転生觀はどのような特質を有するのであろうか。第三に、「生まれ変わり」の問題は、篤胤の幽冥論の中でどのような位置を占めている。

るのであるうか。このように、次々に疑問が生じるのである。「勝五郎再生記聞」は、篤胤国学を考察する上で、重要な問題を含んでいるようと思われる所以である。

そこで、本稿では篤胤における転生観の形成や思想的特質について具体的に検討していくことによって、篤胤国学の思想構造の一端について考えてみたいと思う。

一 『新鬼神論』と篤胤初期の転生観

(1) 仏者と儒者の問答

篤胤は初期の著述『新鬼神論』(文化二(一八〇五)年)の中で、すでに「生まれ変わり」の問題に言及している。仏者と儒者の問答の形式をとつて、次のように始まっているのである。

①さて又仏者の云ふ輪廻てふ事あり。さるは、何某は何某の再生れたるなり、また前身は虫にて有りき、獸にてありきなどと云ふの類なり。(『日本思想大系五〇』所収『新鬼神論』一七三頁)

②儒者これを破りて云ふは、「死るものは神と形と相はないれ、形は朽て土となり、神は風火の如く散してしるとなし。譬へば木草の花の今年咲るは、往年の花ならぬが如く、また川の水の今日流るゝは、昨日流れ

し水ならぬが如し。死たる人のまたかへらぬこともこれに等(ヒト)し。また人の生るゝ事は、木の実より木の生るが如く、梅実は梅樹となり、桃実は桃樹となる。梅の実は桃の木とならず、桃実は梅樹となる事なし。いかで人死(シニ)て再生(フタ、ビウマ)れ、また禽獸・虫魚に生るゝといふ理(コトワリ)のあらむや」とやうに云ふめり。(同一七三頁)

まず、①では、仏者の説く輪廻転生説が簡単に紹介されている。それに対して②では、儒者が魂魄聚散説によつて「生まれ変わり」の不可を主張しているのである。

さらに、仏者と儒者の問答が次のようになつてゐる。

③然るを仏者更にうけひかず、「然らば晋の羊祜が金環を見知り、また鮑覩が井に墮て死たることをおぼえをりたるなどは、いかに」と云へば、……(同一七三頁)
④儒者(ズサ)こゝに至(イタ)りて更(サラ)に弁(ワキ)マ) ふる事能(コトアタ)はずして、「これ妄説なり」など云ひて、強(アナガチ)に云ひ破らむとすめり。(同一七三頁)

③のようすに、仏教側は切り札として前世を記憶していると主張する人々の証言を持ち出している。そして、④では儒者が議論に詰まるという展開になつてゐるのである。篤胤は「生まれ変わり」問題をめぐる儒仏の論争を、このように描き出すのであった。要するに、転生問題は、前

世を記憶していると主張する人々の事例をどのように解釈するのか、という点に最終的に行き着くというのである。

(2) 篤胤初期の転生觀

こうした儒仏の論争に対し、篤胤は次のように論評している。

① 仏者のいはゆる輪廻やうの事も、希々には實にあることなり。その故は、いかなる故によりて然りとも、更に知りがたき事なり。此は神の幽冥なる御所為なればなり。

② 然るを儒者たえてなき事なりと云ふは偏なり。また仏者のこれをなべて然りと云ふも、いよ／＼僻言なり。(同一七四頁)

③ 実には、輪廻と云ふ説は、釈迦ちふ人の民を導くとて、甚々稀にある事を種として造れることなり。天竺の人、いかに愚なりとて、更に微なき事は信まじければなり。

(同一七四頁)

まず、①では、仏者の説く輪廻転生説のようなことは確かにあると断定する。しかし、たいへん稀なことであると

留保をつけているのだ。篤胤初期の転生觀の特色がここに示されているのである。

また、篤胤は「生まれ変わり」の原因について、「いか

なる故によりて然りとも、更に知りがたき事なり。此は神の幽冥なる御所為なればなり」として、明言を避けている。さらに、②のように、儒者の転生否定論を偏った見方であるとして退けている。その一方で、命あるものが生死を無限に繰り返すという見方にも反対するのである。要するに、篤胤は儒者と仏者の両方の説を批判するのであつた。

二 池田冠山の『勝五郎再生前世話』と仏教の転生觀

(1) 勝五郎の一件

『新鬼神論』から一七年後、江戸を騒がせる事件が発生した。武藏国の少年が前世話を語ったというのである。この一件は、やがて池田冠山(松平定常、前若桜藩主)の『勝五郎再生前世話』や平田篤胤の『勝五郎再生記聞』などに結実していくのである。その他、『武藏名勝図会』などにも記録されている。行論の都合上、これらの史料によつて事件の概要をあらかじめ述べておくことにしたい。

勝五郎の語るところによれば、前世は程窪村の藤藏であつたという。すなわち、文化二(一八〇五)年、武州多摩郡程窪村(現在の日野市程久保)に、実父藤五郎(若年の時、名を久兵衛)と母しづの間に誕生した。しかし、藤藏は瘡

痘を病んで、同七年二月に死去した（享年六歳）。それから五年後の文化一二（一八一五）年一〇月一〇日に、同郡の中野村（現在の八王子市東中野）に勝五郎として再生したといふ。

文政五（一八二二）年一一月、勝五郎は前世の記憶がある旨を初めて姉に告げた。このことはやがて、勝五郎の両親（父源蔵、母せい）や祖母つやの知るところとなる。そして、翌年正月二三日、勝五郎とその祖母は程窪村を訪問して、前世の親族に再会する。こうして、勝五郎の記憶が「事實」であることが確認されたという。同年正月二七日に、勝五郎が前世の父とされる藤五郎（久兵衛）の墓参りをするとともに、両家（勝五郎の前世と現世の家）は親族の結びをなした。そして、この前世話は世間に広まることになるのであつた。

さて、この出来事をいち早く聞きつけた池田冠山は、同年春に、中野村を訪問して聞書を作成している。また、同年四月五日に、旗本多門伝八郎は源蔵・勝五郎を出頭させて事情聴取を行つた。さらに、冠山の聞書の写本を読んだ篤胤も大いに関心を持ち、やがて源蔵・勝五郎に会つて聞書を作成するのであつた。これが『勝五郎再生記聞』である。

また、この一件以後、冠山と篤胤が相互の邸宅を行き来

している⁽⁹⁾。交流が長く続くのであつた。なお、この一件から二年後の文政八（一八二五）年八月二六日、勝五郎は平田門人となるのであつた。

（2）冠山著『勝五郎再生前世話』の諸本

先に触れたように、冠山は文政六年春に中野村に赴き、勝五郎の祖母つやを尋問して聞書を作成している。ただし、聞書の原本は発見されていないため、数種類の写本を比較検討しなければならないのである。

1、『勝五郎再生前世話』（早稲田大学附属図書館〈中央図書館特別資料室〉所蔵）

2、『勝五郎前世聞書』（宮内庁書陵部所蔵）

3、『冠山老公御筆記 ほどくぼ小僧前世話』（鳥取県立図書館所蔵）

4、『中野村再生勝五郎前世話』（松浦静山著『甲子夜話』正編 卷二七に所収）

5、『勝五郎の再生』（『仏の畠の落穂』所収）

まず、1の早大本からみていきたいと思う。この写本の書写奥書には、

右は、冠山老侯自ら彼地へ至りて、源蔵か家御尋被成勝五郎をも御覽の上、祖母つやの物語りを、直に被為聞御自身に御筆記遊され候を老侯より直に御話伺ひ且

御筆記を拝借して書写するものなり、文政六年三月

八日 誌置

とある。ここでは、筆写した者は明らかではない。内容は、
①勝五郎とその家族の調書②藤藏とその家族の調書③冠山
の聞書などである。

また、2の宮内庁本では書写奥書は次のように記されて

いる。すなわち、

右は、冠山老侯自ら彼地へ至りて、源藏か家御尋被成
勝五郎をも御覧の上、祖母つやの物語を、直に被為聞
御自身に御筆記遊され候を老侯より直ニ御話伺ひ且御

筆記を拝借して、書写する者也、文政六年癸未三月念
八日 山崎美成識

とある。書写奥書は早大本とほぼ同じであるが、国学者山
崎美成によつて筆写されたものであることが明記されてい
る点に注目したい。内容は①勝五郎とその家族の調書②藤
藏とその家族の調書③冠山の聞書④（奥書の後に）多門伝八
郎届書、以上である。この④は早大本にはない。なお、本
文に十数行ほどの欠落があることに注意しておかなければ
ならないであろう。

さらに、3の鳥取県立図書館本をみていきたい。この書
写奥書は、早大本の書写奥書「右は松平冠山老公の自から
彼地に至り給ひて……」にたいへん近い。しかし、この鳥

取県立図書館本には、新たな奥書が加えられているのであ
る。すなわち、

文政六癸未之歳中夏初三日寫畢老公の彼地に至給ひし
ハ春の頃也とて御自分に窺ひし 處測識

とある。これによれば、鳥取県立図書館本は「處測」が山
崎美成の筆写本をさらに写したものであることが分かるの
である。なお、この写本の内容は、①勝五郎とその家族の
調書②藤藏とその家族の調書③冠山の聞書④（巻末に）多
門の届書、からなつてゐる。内容構成は、宮内庁本に近い
ことがわかるであろう。

4は、松浦静山著『甲子夜話』正編卷二七に所収されて
いる。この「中野村再生勝五郎前世話」の中には、「某老侯よ
り一冊を示さる。前事なれども、小異、詳文とも覺ゆれば
又載す。要するに冥怪のみ」という記述がある。「某老侯」
は池田冠山を指すものと考えられるので、4は、松浦が冠
山から借りて筆写したものということになる。また、内容
は関係者の調書、冠山の聞書などからなつていてゐるのである。
なお、1、2、3に見られない記述もあるが、煩雑になる
ので今は指摘するにとどめたい。

最後に5は、小泉八雲著『仮の畠の落穂』所収の「勝五
郎の再生」である。一八九七年、ボストンのハウトン・ミ
フリン社とロンドンのコンスタブル社から刊行された。内

容は、①八雲によるはしがき②泉岳寺貞金宛池田冠山書状写などの書状③関係者の調書④多門の届書⑤冠山の聞書⑥八雲によるあとがき、以上である。このうち、①②⑥はこの小泉八雲本に特徴的なものである。②は重要なので、後でまた触れたいと思う。

以上、池田冠山の聞書の諸本を一通りみてきた。ここでまとめておきたい。まず、1～3は山崎美成系統の写本であることがわかる。篤胤が見た写本は、こうした美成系統の写本であったと考えられる。また、4は松浦静山が冠山から拝借して書写したものである。5は、池田冠山が泉岳寺に送付した写本が書写され、最終的に八雲によって英訳されたものである。

何れにしても、冠山による聞書は、様々な写本となつて伝来したが、その中心をなす勝五郎一件の内容には大きな異同は見られない。若干の語句の異同や欠落などの問題はあるが、これらの諸本によつて、冠山の転生観を検討することが可能なのである。

(3) 池田冠山の仏教的転生観

冠山の『勝五郎再生前世話』を一読すれば、この勝五郎一件がしばしば仏教的な概念によつて説明されてゐることに気がつくであろう。

例えば、冠山はこの一件を一通り説明した後に、奥書で聞書の成立経過などについて、次のように述べている。

近頃村中にてハ勝五郎といはず程窪小僧とあだ名を呼び、外村よりも見に来る人あれバ、はづかしがりてやにわにかくれるにより、勝五郎直咄しハ聞事不叶、祖母つやの物語りにて、是を書留る也、扱又源藏夫婦祖母つやの内に何かぼだひをせし覚有やととふに、何もさのミ施事もせざ祖母つや明暮念佛をとなふ出家乞食の門口に立時有ば、いつも錢二文ツ、放捨をする外には善事といふ程の事もせざりしといふ（早稲田大学中央図書館所蔵『勝五郎再生前世話』）

勝五郎の祖母は仏教に対して特別熱心というわけではないにしても、まずまず好意的であつたとされている。そのため、こうした孫を持つことになつたとしているのである。また、八雲による英訳『勝五郎の再生』には、二〇日付泉岳寺僧貞金宛池田冠山書状写が含まれている。そこには、次のような注目すべき記述が見られるのである。

この書面と同封で勝五郎転生の物語書をお送り致します。この書は私が通俗的に書いてみたもので、その趣旨はかの仏教の有難い御教へを信じない人達を沈黙させる為にはこの書が効果が多いと思つたからであります。（前掲註(15)の「勝五郎の再生」の二四七頁）

傍線部によれば、仏教の教えを信じない者を黙らせるために、この聞書が有効であるとしているのである。

以上のように、冠山が仏説の正当性を証明する事例として、勝五郎の一件を利用しようとしていたことが分かるであります。冠山は、仏教的転生観によつてこの聞書を著したのであつた。

三 平田篤胤の『勝五郎再生記聞』と国学的転生観

(1)『勝五郎再生記聞』の原本

今日、『勝五郎再生記聞』は、『新修平田篤胤全集』所収本によつて手軽にみることができる。しかし、これは戦前の活字本の復刻であるため翻刻・校訂にかなり不備がある。そこで、平田神社所蔵原本の調査を行つた。以下、原本の構成をみていただきたいと思う。

【前表紙】外題は、『勝五郎再生記聞 評論條々』(題簽)となつてゐる。題簽の右肩に、朱筆で「文政仙洞叢覧本」とあり、また題簽には蔵書印「平田／氏記」(二・五種×二・五種、朱方印、陽刻)が押されている。なお、序文によれば、篤胤が関西に携行した際に表紙はなく、江戸に帰還した後に付されたという。

一紙付されている。内容は、橘南谿(宮川春暉)筆『北窓瑣談』からの引用である。貼紙に引用した理由について、「これ再生のたまの身をはなる、一證となすべし」と説明されている。なお、見返に貼紙を付したのは誰であろうか。これについては後述したいと思う。

【序文】篤胤自筆の序文が一丁あり、全文朱書である。

(文政六年)未十二月十三日付で篤胤の署名があり、花押が据えてある。京都に旅行した際には、表紙や序文はまだなかつたこと、富小路貞直の取り計らいによつて、本書が仙洞御所の叢覧に供された経緯などが記されている。『大壑君御一代畧記』によれば篤胤の江戸帰還は同年二月一九日であるから、この序文は帰還から約一ヶ月後に書かれたことになる。

また、序文の中には、「こゝかしこ折目の付たるハ、仙洞御所の読さしまして、しをりし給つるなりと伺ひつれバ、いとも畏くて朱もてしるしの系をひきつ」とある。つまり、御所から返却された際には、折り目が所々あつたため、これを仙洞御所が折つたものと判断しているのである。そして、篤胤はその折り目に「朱」で「系」を引いたとしている。実際、平田神社所蔵原本を見てみると、折り目の箇所の表裏に朱書で線が引かれていることがわかる。この折り目は、計五箇所(朱筆の線は一〇箇所)である。

【見返】前表紙の見返には、貼紙(一六・三種×八・六種)が

【本文】五種類の文書・記録によつて、本文が構成されている。

①文政六癸未年四月十九日付の御書院番頭佐藤美濃守宛

多門伝八郎届書

②関係者の調書

③文政六年四月二十九日付立入事負記

④文政六癸未年五月八日付伊吹廻屋あるじ記

⑤文政六癸未年六月七日付伊吹舍主又記

このように複数の筆者によつて書かれたものを篤胤がまとめているのである。以下、順にみていただきたい。

まず①は、御書院番頭佐藤美濃守宛の多門伝八郎届書である。旗本多門伝八郎が源藏と勝五郎の取り調べを行つて作成したものである。ここでは、勝五郎の再生話が簡潔に記されているのである。

②は、藤藏とその家族の調書、さらに勝五郎とその家族の調書からなつていて、これらは冠山の記した調書に篤胤が若干手を入れたものである。

③は、文政六年四月二十九日付の立入事負記、すなわち伴信友の作成した記録である。これは「父源藏語りけり」で結ばれているように、勝五郎の父源藏からの聞書となつていて、伴信友による論評はなく、客観的な記録に終止しているのである。

なお、文中の割注に、或人の記録として次のように記されている。

此物語は、四月二十五日氣吹能屋イブキノヤにて聞たり。前に或人のつやに問ひて、記されたる物あるを見置たりけれど。今後さらに、源藏・勝五郎に始終を問て、答へたる趣なり（原本七丁）

傍線部の「前に或人のつやに問ひて、記されたる物」は、池田冠山の聞書を指している。このように、伴は冠山の『勝五郎再生前世話』に言及しているのである。

④は、文政六癸未年五月八日付の伊吹廻屋あるじ記、すなわち篤胤による記録である。まず、同年四月二一日に、篤胤は多門の用人谷孫兵衛を訪問して、一件のあらましを問うている。同年四月二三日に源藏と勝五郎が氣吹舍を訪問するが、このとき篤胤は彼らと対面する。勝五郎自身は、多くを話そうとしないため、父親である源藏から話を聞き出すことになる。

また、篤胤は「○或人の記に。勝五郎をりく。」。我のは、様なれば。大事にして給はれといひ。また早く死ぬことも有むと云ひ。また僧に布施することは。いとよき事ぞと云へるよし見えたり（原本十八丁）と述べている。これは、池田冠山の著述の一部をそのまま引用したものである。

⑤は、文政六年六月七日付の伊吹舍主又記、すなわち篤

胤の追記というべきものである。この書き出しに、

上ノ件の如く論ひとぢめては有れど。なほ足すまに。

産土神の事につきて。また近ごろ見聞たる事の。思

ひ合さるゝ事などを。二タつ三つ記しつぎてむ。(原

本三十七丁)

とある。追記には、多四郎一件など産土神に関する事例が二、三記されている。ここでは「生まれ変わり」問題が、産土神の問題に移行しているのである。

【裏表紙見返】原本の裏表紙見返をみると貼紙が一紙残っている。貼紙の内容は、平田門人羽田野敬雄による神隠しの事例(三河国松平村の産土神六所大明神の一件)の紹介である。

以上、「勝五郎再生記聞」の原本についてみてきた。このうち、篤胤の執筆部分は、主に序文、文政六癸未年五月八日伊吹廻屋あるじ記、文政六癸未年六月七日伊吹舎主又記の三箇所である。しかし、冊子の全体が篤胤によつて構想されたものであることは、いうまでもないことであろう。

(2)『勝五郎再生記聞』の諸本

平田神社所蔵の原本の他に、全国各地に『勝五郎再生記聞』の諸本が残されている(論文末の表参照)。これらは、①多和文庫所蔵本の篤胤自筆草稿、②諸写本、③青森県立

図書館所蔵の版本、に区別できるであろう。また、流布や受容の実態にも注意しなければならない。一例をあげれば、

平田神社所蔵原本→東京大学附属図書館本→岩瀬文庫本→刈谷市中央図書館本の順で転写されているのである。

平田神社の原本にしても、これらの写本や版本と比較することによって、より深く理解できるのである、以下、「勝五郎再生記聞」「再生紀聞」の表記で流布していたことがわかる。筆写の過程で、「勝五郎」を省いた書名で流布したものと思われる。

第二に、「北窓瑣談」の引用の問題である。先に述べたように、平田神社本には、見返に貼紙があり、そこには『北窓瑣談』が引用されている。この貼紙は一体誰が記したのであろうか。実は、羽田野敬雄自筆の豊橋市中央図書館本『再生紀聞』をみてみると、その二十二丁に重要な書入が確認できる。平田神社所蔵本の見返貼紙と豊橋市中央図書館本の二十二丁の書入を対照してみよう。

①平田神社所蔵本の見返貼紙

○北窓瑣談(五丁十
文政十二年二刊ナレル隨筆也)

孤樹袁談ニ菽園雜記ヲ引テ曰明英宗ノ時嘗テ有人臨刑

以三覆奏得タリ免或問當此時自覺心神如何云既ニ昏然
无所之但記ス自座テ屋背上下見一人面縛我ヲ妻子親戚
皆在傍少頃報至ル才カニ得ルコトヲ屋ヲ云々
これ再生紀聞のたまの身をはなる、一證となすへし

(2) 豊橋市中央図書館本二十二丁の書入

タカラ云

○北窓瑣談^{四丁ノ十}

孤樹袁談ニ菽園雜記ヲ引テ曰明ノ英宗ノ時嘗テ有人臨
テ刑ニ以三覆奏得タリ免或問當此時自覺心神如何云既
ニ昏然无所之但記ス自座テ屋背上ニ下見一人面縛我ヲ
妻子親戚皆在傍少頃報至才得下屋云々

右の①・②を比較してみると、『北窓瑣談』のほぼ同じ箇所が引用されていることがわかるであろう。したがって、平田神社所蔵本の見返貼紙は、羽田野敬雄によつて書かれたものと考えられる。なお、各地の写本をみてみると、この平田神社所蔵本見返貼紙は筆写されていないのである。

第三に、篤胤序文の有無についてである。諸国の写本をみてみると、この序文はほとんど見られない。ただし、例外的に東京国立博物館本にはこの序文も筆写されているのである。但し、それは原本のような朱書ではなく、墨書きである。

第四に、伊吹舎主(篤胤)又記の有無についてである。

第五に、羽田野敬雄による裏表紙貼紙の有無についてである。先に述べたように、内容はいわゆる神隠しの事例である。多くの写本は、この羽田野敬雄の追記を筆写していないのである。

第六に、篤胤による筆写の制限について述べておきたい。

豊橋市中央図書館本の奥書には次のように記されている。
右再生記聞ハわが師平田篤胤大人(ウシ)の記し給へ
るが門外不出とさだめていまだ他見ハゆるし給ハぬ書
(フミ)なれバ弟子(ヲシエゴ)のほかハみだりにな見
せずとかたくいましめられたり、されど漢意(カナゴロ)の痴人
神の御所(ミシワザ)為のいとも苛しく靈しく坐すことをしらで、
ひたぶる能奇異ことだにいへバ絶てなきことのミ思へ
る固陋(カクナガ)、口(コ)ノ音(ウブヌ)、言(コザカン)へ
人らに示せまほしく、また産土(ミヌケミ)神御恵の深く厚くま
して其産子(ウブコ)のもち人を幸へ給ふ尊き御謂(ミハレ)をもしらせ
まほしき利意(ゴロ)ハとゞめねて、今ハ心あらむ人々にハ

ひそかに借りしまるらすべくなむなれども、転借者かた

く禁しはべるなり、そハあながちにをしむにハあらね

ど師のいましめの等閑にならむことのなげかはしけれ

バぞかし 文政十三年寅五月廿五日 宇米廻舎主岩崎

帶刀兌健 記（『再生記聞』の奥書 豊橋市立中央図書館・

旧羽田野文庫）

これによれば、『勝五郎再生記聞』原本は「門外不出と
さだめていまだ他見ハゆるし給ハぬ書」であつたという。
篤胤がこの著述の閲覧や筆写を制限していたというのであ
る。

第七に、写本以外に版本『再生記聞』があつたことに注
目しておきたい。確認できたのは、青森県立図書館所蔵の
版本のみである。これは、安政四年閏五月三日付の今村真
種（津輕藩士）の奥書を加えて刊行されたものである。奥
書によれば、平田鍊胤から送られてきたものを忠実に板木
に彫つたということである。

以上、『勝五郎再生記聞』の諸本を比較検討してみた。
原本と同じ構成の写本・版本は、見つからないことがわか
るであろう。原本のような構成のものが流布していくわけ
ではないのである。なお、『勝五郎再生記聞』の流布と受
容の実態については、さらに検討が必要であろう。

(3) 篤胤の転生觀と産土神
篤胤は、勝五郎の父親源藏との問答によつて聞書を作成
しているが、この際、藤藏から勝五郎へと再生に導いたと
いう「翁」に関心を集中させている。篤胤は、その「翁」
の正体を次のように説明するのであつた。

○こゝに我も人も。しか産土神をねむごろにすと聞
くにつけて思へば。彼ノ勝五郎を「あの世で一中川註
伴ひたる翁といへること。疑なく産土ノ神にて在けめ
と云ふに。源藏〔勝五郎の父親—中川註〕云く。其ノ事
はこのほど西教寺へものしける時に。彼所にても然云
はれたりき。（中略）産土ノ神ならむと言ノタマふにつ
きて。いさゝか思ひ当れる事のあるを。（原本二十一丁）

この「翁」は産土神であるという。すなわち、勝五郎の
「生まれ変わり」は、産土神の取り計らいによるものと結
論づけているのである。中野村の産土神が「翁」の姿であ
らわれて、藤藏を勝五郎に再生させたという解釈である。
こうした説明は、『勝五郎再生記聞』の特徴的な主張であ
るということができる。『新鬼神論』では、「生まれ変わ
り」の原因について何も述べていない。『勝五郎再生記聞』
にいたつて、ようやくその原因の説明がなされているので
ある。

なお、篤胤が『勝五郎再生記聞』を著述しながら、同時

に幽冥論を深化発展させていることに注目したい。「靈能真柱」（文化一〇（一八一三）年刊）の段階では、幽冥界は大国主神が統治すると説明されているにすぎない。しかし、この『勝五郎再生記聞』では、

さるは凡てこの現世の上に大君おはし坐て。御政事の大本を統治め給ひ。国々所々をば。そを分ち司る人々を任して。治めし給ふが如く。幽冥の事の大本ハ

大国主神統治め給ひ其ノ末々はまた国々所々の鎮守ノ神。氏神。産土ノ神など世に申す神たちの持分けて司たまひ。人民の世にある間は更にも云はず。生れ来し前も身退りて後も。治め給ふ趣なり。（原本二十九丁）

と説明されている。このように、『勝五郎再生記聞』では幽冥界での分掌といった説明が初めて登場しているのである。大国主神が幽冥界全体を統治するにしても、人々の生前および死後の管理の実際は、産土神が行うというのである。「靈能真柱」段階より、篤胤の幽冥論は深化しているのであつた。

(4) 儒学の否定論と仏教の輪廻転生説

篤胤は『勝五郎再生記聞』の中で、儒者・仏者の転生觀をともに批判する。まず、儒者の説について、次のように述べている。

「新鬼神論」と同じ趣旨であることがすぐにわかるであろう。「生まれ変わり」とされる事例は、あらゆる地域にみられるが、これらを輪廻転生説によつて解釈することに反対するのである。

さて勝五郎がことの如きも、法師たち、また法師なら見識（コヽロ）せまき漢意の学者たちの。此理をつや／＼得知らで。有まじき事のごとく強言（シヒゴト）すめれど。前に鬼神新論を著して云へれば。さる倫（トモガラ）は今さら論（イ）ふにたらず。（原本二十四丁）

儒者の転生否定論について、「今さら論ふにたらず」としている。初期の著述『新鬼神論』で述べたことを繰り返しているのである。

また、篤胤は仏教の輪廻転生説を批判して、次のように述べている。

佛者早や、其ノ旨を得たる説ども、聞ゆれども。余りにさだし過て。なべて再生転生する事のごとく云ふめり。（中略）佛者のその希なる事を常にとりて。然は論（アレッタ）ふなり。（原本二十四丁）

「新鬼神論」と同じ趣旨であることがすぐにわかるであろう。「生まれ変わり」とされる事例は、あらゆる地域にみられるが、これらを輪廻転生説によつて解釈することに反対するのである。

さらに、篤胤は「法師ならぬも、仏意にしみたる人々」の転生觀を批判する。すなわち、

さて勝五郎がことの如きも、法師たち、また法師なら

ぬも、仏意にしみたる人々ハ、くさ／＼其ノ方ざまに思ひよせて。仏經説の証（アカシ）となさま欲（ホシ）

がり。旧（フル）くも今もかゝる事としいへば。仏の異験のごとく心得て。其ノ事を記すにも。しひて其ノ

趣にかき取らむとするは常なれども。凡て天堂地獄再生転生因果報応などの趣は。その伝への精粗こそはあれ。何れの国にも本より有^{アリ}來し事にて。仏祖のはじめて言ひ教へたる説には非ず（中略）。そハいまだ仏説のわたり來ざりし以前の。和漢の書の古事を委くよみ味ひて思ひ弁ふべき事ぞかし。（原本三十五／三十六丁）

とある。すなわち、仏教に同情的な論者によつて「生まれ変わり」の事例が、「仏經説の証」と解釈されていることを問題視するのである。この文中の「法師ならぬも、仏意にしみたる人々」というのは、冠山などを指しているものと考へられる。すなわち、篤胤は池田冠山が勝五郎一件を仏説の証明に利用しようとしていることに反対しているのである。

以上のように、篤胤の『勝五郎再生記聞』は、冠山の仏教的転生觀を批判して、国学的転生觀を提起するものであつたといえよう。

おわりに

篤胤の転生觀の特色は、①「生まれ変わり」といったことは確かに事實であるが、ごく希な出来事であるとしていること、②「生まれ変わり」は主に産土神の取り計らいによるものであると解釈していること、以上二点に集約されるであろう。このうち、①は『新鬼神論』の段階ですでに出てゐるが、②は『勝五郎再生記聞』にいたつてはじめて登場するものである。

また、篤胤は儒者の説く転生否定論と仏者の輪廻転生説の両説を批判している。殊に、池田冠山の『勝五郎再生前世話』に示された仏教的な転生觀を批判して、これに代わる国学的転生觀を提示しているのであつた。

このように、篤胤は「生まれ変わり」の問題に取り組んでいるのであるが、その過程で幽冥論を深化させている。すなわち、『靈能真柱』では幽冥界における大国主神の統治について記しているが、産土神の役割については述べていない。しかし、『勝五郎再生記聞』になると、人の生前死後における產土神の役割の説明が加わっている。勝五郎一件の研究によつて、幽冥論を深化させることになつたのである。

なお、『玉櫻²⁰』では、『勝五郎再生記聞』に関する記述はごく僅かではあるが、産土神に関する神学的解釈の中に生かされているのである。そして、篤胤が産土神の役割を重視したこととは、六人部是香など平田派国学の新たな展開を促すことになるのであつた。これについては、今後の課題としたいと思う。

註

- (1) 平田神社には、①文政仙洞叢覧本『勝五郎再生記聞評論條々』、②文政仙洞御所叢覧本模写『勝五郎再生記聞評論條々』の二冊が所蔵されている。また、芳賀登編『新修平田篤胤全集』(名著出版、全二卷、昭和五一²¹—一九七六年²²、同五六²³—一九八一年) 第九巻所収本の底本は上記の①である。しかし、この全集本は校訂に不備があるため、原本調査が必要である。例えば、全集本『勝五郎再生記聞』の六二九頁上に「仏の異験」とあるが、原本によつて確認してみると、「仏の靈験」とあることがわかるのである。
- (2) 村岡典嗣著『宣長と篤胤』(創文社、昭和三二²⁴—一九五七年) 一四一²⁵—一四二頁。
- (3) 田原嗣郎著『平田篤胤』(吉川弘文館、人物叢書、昭和三八²⁶—一九六三年) 二一〇²⁷—二二一頁。

(4) 三木正太郎著『平田篤胤の研究』(臨川書店、昭和四四²⁸—一九六九年) 三九九²⁹—四〇〇頁。

(5) 子安宣邦著『平田篤胤の世界』(ペリカン社、平成一三³⁰—一〇〇一³¹年) 三〇八頁。

(6) 浅野順平『『勝五郎再生記聞』をめぐって』(同『近世国学論叢』所収、翰林書房、平成一³²—一九九九年)。

(7) 『新鬼神論』(田原嗣郎校注『日本思想大系五〇』、岩波書店、昭和四八³³—一九七三年) 一七三頁。

(8) 植田孟縉著・片山迪夫校訂『武藏名勝図会』(慶友社、昭和四二³⁴—一九六七年) 一二三一頁にも、「前生覚知の小童」と題する短編がある。著者植田孟縉は八王子千人同心の出でである。これには、「江戸などにてもその奇事を伝え聞いて専ら奇談のこととなせり」(同二三三二頁)とある。江戸にまでこの噂が伝わつていたことがわかる。ただし、勝五郎の祖母を母と取り違えているなど、史料としての信憑性には問題があることを指摘しておきたい。

(9) 冠山と篤胤の交流については『氣吹舎日記』(渡邊金造著『平田篤胤研究』の第三篇の日記篇に所収)に記されてゐる。すなわち、文政六年一〇月二二日、文政九年九月二九日、文政一年八月二〇日に冠山が氣吹舎を訪問している。さらに、文政一〇年五月一七日には平田鍊胤が冠山を訪問しているのである。

- (10) 勝五郎が門人になつたという記録は、①『氣吹舍日記』(渡邊金造著『平田篤胤研究』の第三篇の日記篇に所収)、②『誓詞帳』(『新修平田篤胤全集』別巻所収)、③『門人姓名錄』(『新修平田篤胤全集』別巻所収)にある。
- (11) 『勝五郎再生前世話』(早稲田大学附属図書館〈中央図書館特別資料室〉、請求記号「へ13-361」)。明治三十五年一月廿七日森鴻次郎氏寄贈 写本一冊、墨付一〇丁、半紙本・明朝綴、一三・三・二糸×一五・七糸、原題簽「兒子再生前世話」、内題「武州多摩郡中野村勝五郎再生前世話」、印記「水府／森氏／図書」。
- (12) 『勝五郎前世聞書』(宮内庁書陵部所蔵、函号「206-137」)、写本一冊、墨付九丁、半紙本・明朝綴、一四・〇糸×一七・〇糸、打付外題「勝五郎前世聞書」、内題なし、印記「帝室／図書」。
- (13) 『冠山老公御筆記 ほどくば小僧前世話』は、鳥取県立図書館に『定常公御撰家訓 婦人教訓要草』(150-3-郷土WH)として所蔵。一冊、野紙、表紙なし、全五丁、二五・〇糸×一七・〇糸。
- (14) 中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話2』(東洋文庫三一四、平凡社、一七八〇-一八二頁)の「〔武藏國中野村〕再生勝五郎前世話」を参照した。この前世話は、松浦靜山著『甲子夜話』正編卷二七に所収されているものである。この底本は松浦素氏蔵「平戸藩 樂歲堂藏書本」である。この中で、
- (15) 小泉八雲著の「勝五郎の再生」を参照。原題は、*The Rebirth of Katsugorō*である。なお、本稿では翻訳書として、小泉八雲全集刊行会『小泉八雲全集』(第五巻、第一書房、昭和元(一九一六)年)に所収されている『仮の島の落穂』の金子健二訳「勝五郎の再生」を参照した。
- (16) 橘南谿(宮川春暉)著『北窓瑣談』については、国民図書株式会社編輯『日本隨筆全集』(昭和二(一九一七)年)第四巻の二八六頁を参照。
- (17) 『新修平田篤胤全集』第六巻所収「玉たすき附」の六一頁を参照。
- (18) 多和文庫の篤胤自筆草稿は巻末の三丁分である。草稿の第一丁は、『新修平田篤胤全集』第九巻所収本の六一〇頁上段一行目～同頁下段七行目までの二五行分に相当する。また、草稿の第二丁は全集本の六一八頁下段一五行目～六一九頁上段一大行目までの一八行分に相当する。さらに、草稿の三丁は、全集本六一九頁下段一行目～六二〇頁上段一行目までの二七行分に相当する。

(19) 今村真種（いまむら・みたね）については、『青森県人名大事典』の六三頁を参照。

(20) 版本『玉櫻』（早稲田大学附属図書館（中央図書館特別資料室）所蔵、請求記号「ハ3-101-1-9」）の五之卷五十六丁には、「此ノ世は更なり。後の世とても。神に能く奉仕するをば。産土ノ神は申すも更なり。神たちみな幸ひ坐して。其ノ帰る所は定め給ふ事になむ。其は近頃の事なれど。思ひ合さるゝ事ありて。書留たる勝五郎再生紀聞と云ふ物に。和漢の故事を。見得るまに／＼附録となし。評論せるを見て知るべし。」とある。

（早稲田大学大学史資料センター）

表 勝五郎再生記聞の諸本

表 謄五郎抄神王記開の版本										
所蔵	外題	内題	刊写冊数	墨付	形態法	量	装」	印記	書写事項	
平田神社 豊橋市中央図書館	「勝五郎再生記開 謡傳々」(原題簽)	「勝五郎再生記開 評」(原題簽)	写本一冊	53	大本 18.0	27.3× 18.0	朝鮮紙	「平田／氏記」 原本	見返 の文 の序 の届者 の關係 の書 の調書	見返 の文 の序 の届者 の關係 の書 の調書
平田神社	「再生記開」(原題簽)	「再生記開」(原題簽)	写本一冊	53	大本 18.3	26.5× 19.0	朝鮮紙 書印」	「小野／村藏」 「謙写本(明治廿四年 九月十一日)」 伊吹舍門 人小野村龍信写 (花押)	貼紙○ ○(文入 事真記) ○(文入 事真記)	貼紙○ ○(文入 事真記) ○(文入 事真記)
新城市教育委員会(牧野文庫)	「再生記開」(原題簽)	「再生記開」(原題簽)	写本一冊	42	大本 19.7	27.5× 19.7	朝鮮紙 印」	「羽田華」 「參河國 樹園」 「藝文政十三年 正月写」 「勧水七甲 實」 「月寄藏書 百」 「部子吉 神車」 「以 羽不朽」 「三河 官 羽田八幡神 整敬 雄」 「羽田八幡神 整敬 雄」 「清浦」 「豊 橋市立 圖書館	× ○ ○ ○(伴信 友記)	× ○ ○(伴信 友記)
神宮文庫(三重県)	「再生紀聞」(原題簽)	「再生紀聞」(原題簽)	写本一冊	37	大本 19.1	26.8× 19.1	明朝紙 印」	①文政十三年 正月写 ②同年六月 廿三日中 山慶樹写 ③天保三年 霜月二日司 守鑑岩 之丞写	× ○ ○(伴信 友記)	周美紙、 国文研所 蔵未記号 「255-42-8」
神宮文庫(三重県)	「再生紀聞」(原題簽)	「再生紀聞」(原題簽)	写本一冊	31	大本 19.7	27.8× 19.7	明朝紙 「神宮／文庫」 写	①文政十三年 正月写 ②天保三年 正月前川 吉簡写 ③天保五年 二月二十五日 御巫清直 写	× ○ ○(伴信 友記)	周美紙、 門号 「3-4561」
神宮文庫(三重県)	「再生紀聞」(打付外 題)	「再生紀聞」(打付外 題)	写本一冊	31	大本 19.7	27.8× 19.7	明朝紙 「神宮／文庫」 七日羽田野敬雄 写	①文政十三年 正月写 ②天保三年 正月前川 吉簡写 ③天保五年 二月二十五日 御巫清直 写	△(書 写段階 で省略 した旨 の記述 あり)	原表紙、門号 「11-2045」 22年6月2日 山口猛之亮

所蔵	外題	内題	刊写	冊数	墨付	形態 (cm)	法量 表丁	印記	書写事項		見返 篤胤 多門 関係 の序 の届 の文 書	伊吹廻 の見返 屋のあ る記	伊吹舍 主文記 裏表紙 備考
									書	画			
神宮文庫(三重県) 東京大学総合図書館 西尾市立図書館 (岩瀬文庫)	「再生記文 全」(打) 「再生紀聞」(原題簽)なし	「再生紀聞」(原題簽)なし	写本一冊	55	大本 18.0	26.2×	明朝版	「神宮文庫」 「嚴之莫屋」 「東京帝國大 學圖書印」	○	○	○(伴信)	○	原表紙、四号 原表紙、請求番号 e20-22」
刈谷市中央図書館 静嘉堂文庫 多和文庫(香川県)	「再生紀聞」(原題簽)なし	「再生紀聞」(原題簽)なし	写本一冊	31	半紙 17.7	24.5×	明朝版	「岩瀬文庫」他 「竹尾高齋写」 「九月廿二日」在慈堂写 「大正記念」 「井圖書」 「刈谷圖書館」 「静嘉堂圖書」 「藏写」	○	○	○(伴信)	○	函号「158-184」 原表紙、合綴本、 資料「30-1179-4」
静嘉堂文庫 多和文庫(香川県)	「再生紀聞 全」(原 題簽)	「再生紀聞 全」(原 題簽)なし	写本一冊	54	大本 19.4	28.0×	明朝版	「色」三中 「静嘉堂圖書」 「藏書」	○	○	○(伴信)	○	原表紙、函表番号 「74-21」、書川三 中の旧蔵書
静嘉堂文庫 多和文庫(香川県)	「勝五郎再生記聞」 (原題簽)	「勝五郎再生記聞」 なし	写本一冊	46	大本 18.4	26.4×	明朝版	「田中本」、「雲 岫」、「静嘉堂 藏書」	○	○	○(伴信)	○	原表紙、函表番号 「74-24」、田中頼 晴の旧蔵書
静岡県立中央図書館(茅文庫)	「再生紀聞」 (原題簽)なし	「再生紀聞」 (原題簽)なし	写本一冊	29	大本 18.9	27.9	明朝版	「香木舍文庫」 「此書者讀破國人 人」、「松園子等 也所」、「藏文庫在 志度鄉多和神 社之東下」、「多 和」、「文庫」 「大口」、「善言」 「文庫」、「駿州 府」、「江川」、「砂 屋印」、「静岡 縣立」、「義文庫 藏書之印」	○	○	○(伴信)	○	原表紙、草稿3丁 合綴本、国文研の請 求記号「N2772」
東洋大学附属図書館 (哲学堂文庫)	「再生記文 全」(原 文)	「再生記文 全」(原 文)	写本一冊	50	大本 18.5	26.5×	明朝版	「内山之」、「足 立」、「藏書」 「甫水井」、「上氏 藏」、「圓了」、「文 庫」、「御大典」 「紀念」、「圖書」、「告 學堂」、「甫水」、「圓 了」	○	○	○(伴信)	○	原表紙、卷末に羽 田野敬雄の記が記 され、「羽田野敬雄 記」、「12155」

所蔵	外題	内題	刊写	冊数	墨付	形態	法 量	装丁	印記	書写事項	見返	算用	多門	關係	伴友記	伊吹舍	墓表紙	備考
東洋大学附属図書館 (付外題) 書館・宿室文庫	「勝五郎再生紀聞」 (付外題)	「勝五郎再」写本 一冊	28	大本 18.3	25.1×	明朝綴 藏,	「甫水井」上氏 「圓了」文 「御大典」 「明治四年正月二十七 日朱絆の裏あつて写, ③明治六年十二 月龍田神社權宜尾 崎脩音書写, ④明治 七年六月一日大神の 例祭の明日丹生川 上神社少宮司秋山教	18.3	印記	書写事項	見返 の序 文	算用	多門	關係	伴友記	伊吹舍 主又記	墓表紙	備考
国立国会図書館 古典籍資料室	「再生紀聞」 (題)	「再生紀聞」写本 一冊	35	半紙 16.8	23.2×	明朝綴 文庫記,	「福山國史」兼 八年文部省交 付J., 他ローマ 字印あり	明朝綴 「井上／氏」 「井上／賴國藏」 「無窮会／神智 文庫」	不明 明治明の写本 か)	○(立 入)	○	○	○(立 入)	○	×	原表紙,	請求記号 142-137」	
無縫合専門図書 館(神智文庫) (題)	「再生紀聞」 (付外)	「再生紀聞」写本 一冊	44	大本 19.4	27.5×	明朝綴 「井上／氏」 「井上／賴國藏」 「無窮会／神智 文庫」	不明 明治明の写本 か)	○	○	○(立 入)	○	○	○(立 入)	○	×	原表紙,	請求番号 3103」	
秋田県立図書館	「再生奇聞」 (題)	「再生奇聞」 (原 題)	写本 一冊	51	大本 19.0	27.3×	明朝綴 藏/書之印」	不明	○	○	○(伴 信)	○	○	○(伴 信)	○	○	原表紙, 卷末に 五十石トイフ書の 抜萃を合収, 明 治三十五年六月九 日購入, 請求記号 平24J	
京都大学附属図 書館	「勝五郎再生紀 聞」 (原題)	「武州多摩写本 五郎生替」 件)	写本 一冊	58	半紙 16.3	23.3×	明朝綴 學/圖書之印」	明朝綴 「京都市帝國大 學圖書之印」	○	○	○	○	○	○	○	原表紙, 請求記号 8-86 カ 2」		
東京国立博物館	「再生紀聞」 (題)	「武州多摩写本 五郎生替」 件)	写本 一冊	47	半紙 16.7	23.3×	明朝綴 亭家藏」 「美文改七年二月堤朝風 書」 川宗政氏帝贈 「國立博物館圖 書之印」	明朝綴 「美亭」上氏 「德写」 「日今村真蘿の奥書き 加えて刊行 印」, 「工藤祐司 殿寄贈第 号」	○	○	○	○(立 入)	○	○	○	原表紙, 列品番号 G-3&6130」		
青森県立図書館 (工藤文庫)	「再生紀聞」 (原題)	「再生紀聞」 (原 題)	刊本 一冊	48	半紙 16.3	23.5×	明朝綴 「桃舍藏書」 「工藤」上氏 「祐司」之 印」, 「工藤祐司 殿寄贈第 号」	安政丁己年閏五月三 日今村真蘿の奥書き 加えて刊行 印」, 「工藤祐司 殿寄贈第 号」	×	○	○	○(伴 信)	○	○	○	原表紙, 原刊記号 13-ヒックタ」		

(註1) 上記の以外に、金刀比羅宮図書館本(一冊)、茨城大学蓄文庫本(「再生紀聞」一冊)、大阪市立図書館矢野文庫本(一冊)、東北大学附属図書館狩野文庫本(「文政仙洞散覧」勝五郎再生紀聞 明治論)、天保八年修正盛写、一冊)などがある。(註2)Oは、該当する文書がある。×は該当する文書なし。